

---

# やさぐれ勇者血風伝 勇者様はオヤジ！？

土方 真吾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

やせぐれ勇者血風伝 勇者様はオヤジ！？

### 【Z-コード】

Z1296Z

### 【作者名】

土方 真吾

### 【あらすじ】

異世界から呼び出された勇者である主人公。そして、勇者様を手助けするべく行動を共にする少女。「ごく普通（かな？）のふたりは、ごく普通（っぽい？）の恋をし、やがてごく普通（と言い切れない可能性もあり？）の結婚をします。でも、ただひとつ違っていたのは、勇者様は……オヤジだったのです。このお話には、パロディオマージュリスペクト様々な名目で何処かで聞いたようなネタが含まれます。

また、このおはなしには過激残酷その他もろもろの有害とされる表

現が含まれるかもしません。含まれないかもしません。  
これだからラノベは子供たちには許せない許さない読ませられない  
などとおっしゃるに、「あ、このネタ見たぜ HAHAHAWWW  
WW」ぐらいの勢いでご笑覧いただけすると幸いです。  
勿論、箱入り娘の脳みそがとろけだしたりする副作用はございません  
ん。タブン。

「……勇者殿」

今日、朝からの出来事を思い出す。とは言え、普通に朝飯を食つていて、気が付いたらソリソリいた。

「……勇者殿？」

ため息を一つ。

仕方ないので軽くこれまでの人生を振り返つてみる。

たいして実りのない人生だった。

家族もおらず、貯金もない。

最近はすっかりメタボ気味な腹と、薄くなつた頭が寂しい。

なんだか死にたいほど虚しくなつたので遠い目をしてみると、ガツと鈍い音とともに目から火花が出るような痛みが襲つた。と言うか本当に火花でた。チカチカつと。

「つう～～～ な、何しやがるクソガキっ」

「せつきから呼んどるじやうが、クソオヤジー！」

視線を落とせば、何やらねじくれた木の枝をグリグリと押し付けてくる少女が目に入る。

純白の長い髪をなびかせ、ルビーのような透き通る深紅の瞳を大きく見開いて、プリプリ怒つている姿はどこまでも愛らしかつた。

「マイツがこの杖で向こうの脛をひっぱたいたのでなければ、だが。

「いいか、お兄さんは勇者とか言つ奇天烈なジョブにはついてないんだ。他を当たってくれ！」

ペシツと杖を払いのける。

「わしだつて貴様のようなオッサンが勇者なんて思わんわつ」

払いのけた杖を再び突き付け、少女は偉そうに薄い胸をそらして言った。

「じゃが、召喚呪法は成功してあるのだ！ 貴様がなんであれ、この魔王との戦争を終わらせる鍵」

ジックリと見つめるこちらの視線に、深紅の瞳が自信なさ気に泳ぎ始め、やがてそらされる。

「ノハズ…タブン」

「オイイイー？」

といふあえず説を申と申と申てゐる。

長い間平和に過ごしてきたこの世界は、突如北方に現れた自称魔王の侵略を受けた。

そして

「人類は滅亡しました！」

「 しとらんわーっ！ ！ つて言うか爽やかな笑顔でなんてこと抜か  
しあるか、このクソオヤジ！ ！」

怒り狂つて襲い掛かる白い少女の頭をわしづかみにして止める。この少女はこんななりをしているが、<sup>よい</sup>歳三百を越える大賢者、レナンと詫ひらしい。

「どう見てもただのちびっこだが」

あひる、鳴つたなー。」

ハハハハ  
賢者賢者  
ふう

# ムギーッ!!

レナンはジタバタともがいて、掴んだ手からよつやく脱出すると杖を突き付けてきた。

「うひ、うひやうひ、わしを本氣で怒らせたこよひじやな～～～～つ  
「涙目でそんな」とを言われても、なあ？」  
「ウヌヌヌウー。」

実にからかいがいのある少女だ。

「よからうー ぬしの旅の連れにと、白魔術師を呼んである。  
そろそろここへ到着する頃合いじゃ。こんがり炎つても、死なぬ  
程度に治せるじゃろー！」

クックック、謝つても容赦せんからの？

魔術の力、存分に味わえイ！」

レナンの雰囲気が一変し、複雑な身振りで杖を振り回す。  
視覚では捕らえられない何らかの力がその華奢な体を巡り始め、  
つややかな唇が唱える呪文が神秘の威力を

「ひぎゃつー？」

発揮しなかつた。

「アホの子だろ、お前……」

何をやつたのかと言えば、一歩前に出てその頭を拳骨で小突いて  
やつただけである。

衝撃で魔術が詠唱中断「スペルブレイク」するのは全世界共通ら  
しい。

「ず、ずるいぞ……」

「ずるいもクソもあるか。

敵が目の前で呪文を唱えてるのに、なんで黒焦げになるのを黙つ  
て待たにやならんのだ」

右手をワキワキさせながら、涙目で殴られた所をさするレナンに

詰め寄る。

「ま、まて。まだなにかするつもりか！」

「おひ。敵にはきつちりトドメをわざるとな？」

「て、敵？ カワコイ少女のお茶目な悪戯ではないか。笑つて赦すのが大人の男と言つものじやろつ」

顔色を変えて後ずさるレナンに、シコリと微笑んで見せる。

「せうだな……」

「おお、わかつてくれたか。さすがはわしの見込んだ勇者じや！」

ホツと安堵の息をもらすレナンに、判決を告げる。

「だが、悪戯好きの子供の躰も大人の義務だ」

ひょいと抱え上げると予想外に軽い。

「え？ え？ え？」

突然のことに真っ赤に頬を染めて動搖しているレナンのスカートをペロツとまくる。

「ちよつ なにをつ」

「子供の躰は尻叩きと相場が決まってるだろ？」

「いやじや！ ていうか、変な所触るなクソオヤジ！ みやああああああ！」

## 黒魔術師はアホの子でした

始まりはいつも突然、と歌の文句にあるように、ドアが開いたのはいきなりだった。

「レナン様ー、居ないんで…… す、か？」

どうやら、騒ぎすぎてノックに気付かなかつたらしい。

入つて来たのは、年の頃16～7ぐらいの少女が一人。

黒髪をキュッとポニーtailに結い上げた気の強そうな方がドアを開けた姿勢のまま固まり、その背中越しに覗き込んだ柔らかそうな金髪の優しげな顔立ちの少女の方は、「え？」 つと、困惑の声と共に、みるみるうちに真っ赤に頬を染めた。

さて、状況。

ドアを開ければ美少女（自称）が、ムサイオヤジにスカートを捲られ、パンツを半分ずり下げられている。

「君は、ひきつった笑みを浮かべて、

「お取り込み中でしたか、失礼しました」とドアを閉めてもいいし、無言で立ち去つてもいい

「するかつ この不埒者め……」

黒髪の少女は電光石火の動きで部屋に飛び込むと、容赦ない平手打ちを叩きこんできた。

「やつですね。誰だつてやつある。俺だつてそーする……」

腰の入った平手打ちがいい感じに決まつたせいか、クワンクワンとめまいがする。

魔の手を逃れたレナンは、叩叩叩とわざわざじく泣き崩れる。

「えぐえぐ、嫌だと嘗つて無理矢理このクソオヤジが……」「な、なんて非道な！」

その言葉に黒髪の少女がますます激昂する。

「うつわ、事実しか言つてないけど汚くないか、それ！？」  
「それにレナンをまも、なんだか楽しそうだったよ？」

「ひらの主張も金髪の少女の言葉もあるつき無視して、ビシリと杖を突き付けてきた。

「じつやつ遠慮の必要はなやつね。この一撃で黒焦げにしてあげるわー！」

同時に複雑な身振りと呪文の詠唱がはじまる。  
今はマズイ、ダメージが足に来ている。

「風の乙女よ、その力を　　」

早く中断させないと……

「荒れ狂え、真空の　　」

せめて、逃げないと……

「引き裂き、焼き尽くせ

視界が正常に戻るが、黒髪の少女はまだなにかノリノリで詠唱を続いている。

「……なあ。いつ発動するんだ、これ？」

うむ、今呪法修飾部分が終わったから、まあ一分くらいかのう」

このあたり、ケロッとした顔でそばに居たレナンが解説する。

「魔術師全員アホの子だろ…」  
おまえら

黒髪少女の襟首をつまみ上げて外にほうりだす。  
ガチャリと扉に鍵をかけたところで

「稻妻よ、焼きぬへせーつて、何で外に！？」  
「あああああー。」

「うむ、暴発したようじゃな」

家の外で爆音と悲鳴が上がった。

## 白魔術師はグレープフルーツがよく似合つ

「はじめまして、勇者さま。白魔術師のシロエ・リリンホワイトと申します」

スカートのはしをちょことつまんで、優雅に一礼した金髪の少女は次に寝室の扉を示す。

「彼女がクロテア・ローゼス、黒魔術師です。  
ご無礼をお許しください。  
悪い子じやないんですけど、ちよつとだけ、その……」

「クロは頭に血が上りやすくての」

ポリポリとクッキーをかじるレナンに冷たい一瞥をくれると、そっぽを向いて鼻喰を始めた。

魔術の電撃でいい感じに焦げていたクロテアは、シロエとレナンがベッドへ運んで魔術で治療した。

今はシロエのお土産のクッキーとお茶で一息入れたところだ。

「気にしなくていい、状況的に仕方ないだろ。

あと、見た目通りでただのオッサンだ。勇者でもなんでもない」

「つむ、カワユイ美少女がムサイオッサンに襲われておつたら、助けるのがあイタタタつ」

レナンの頬をつまみ上げると、シロエは楽しそうに微笑んだ。

「でも、すうじいですね」

「なに、ぐああ～～ッ！～！」

右手に激痛が走る。

レナンが頬をつまむ手を振り払つて、逆にかじりついていた。

シロエがクスクスと笑いながらレナンにクッキーを差し出すと、「おお、良口直しじゃ」などと抜かして口を放した。

「ああ、イテエ。歯型ついてるが、くわい」

「軽々しく乙女の柔肌を掴むからじゅー」

「へえー、処女、ね」

「いやらしげ言い方するでないわ、助平親父

」

「それですよ、それ

睨み合つてこるとこひこ、シロエが割り込んでくる。

「なにがじゅ？」

「レナンさま、自分でお氣づきじゅないんですね。

勇者をまと話してゐる時のレナンをまば、ものすうじへ楽しむのですよ？」

「わいむ

「私達とだつてそんなに話さないじゅないですか。

お客様さまが貴族でも用事が済んだらすぐ追い返しかよりう

レナンは不愉快そつこ口をくのせつて、ちいからといがいわつかがう。

「い、いや。『ヤツ相手だと悪口に遠慮がいりんと畜つか、その…」

何やらモモ吉とシロエ、手のかかる妹を見るかのよつた優しげな目で微笑んだシロエは、こちらに向かつて話しかける。

「今まで魔術師をああいつ方法で無力化した人はいません。勇者さまが初めてですよ！」

「…ああ、ソウテスカ。魔術の師匠どもはどんな教育してるんだか」

あまりの脱力感に、がっくりと崩れ落ちてテーブルに頬をつける。一体、この世界はどんな魔術の世界だろうか…

「あ。でしたら、お城に行くついでに、アカデミーにお寄りになればいいと思います！」

シロエが少しこちらに身を乗り出ると、なかなかにボリュームのある胸がテーブルの上でムニコッとした形を変えた。

「グレー・フルーツ？」

「このエロ親父め…」

すかさずレナンが耳をつまんでギュッと引っ張る。

シロエは一瞬、きょとんとしたがすぐに気が付いて、胸を抱き寄せるように隠した。

「もう。駄目ですよ、勇者をまつたら」

少しだけ頬を染めて、はにかむシロエはむやみやたらに可愛い。

「鼻の下伸ばしすきじや、たわけ」

「だつてよ～」

レナンがしつこく耳をぐいぐい引っ張るが、赦す。  
今までの人生で、美少女に囲まれたこんなアレな時間があつただ  
らうか？

いや、ない。

「レナン様！ シロ！ 無事なの？！」

寝室の扉がドバンと開いて、幸せな時間はあっさりと終わった。

クロテアは頬を染めて胸を抱きしめるシロに向かって、今度はどんな勘違いをしたのやら、プルプルと怒りに震えながら指をビシリと突き付ける。

「あ、あ、あんた、レナン様はともあれ、シロにまで  
「わしさともあれかい……」  
「クロちゃん、違うの。これは  
「問答無用！…」

頼むから、俺と問答をして欲しい。  
どうせ聞いてくれないっぽいから言わないが。  
クロテアは再び杖を構える。

「立て、下郎……」

ため息を一つ。

そこまで言われたら腹も立つ。

「お前、覚悟をしてるんだな？」

「は？」

クロテアは整った眉をひそめた。戸惑いがその瞳に混じる。

「人を殺そうとする以上、相手に逆に殺される覚悟を、自分のすべてを失う覚悟をしていると判断するぞ」

固く冷たいものを声に乗せる。

クロテアに背を向けて、テーブルからカップをとり、少し冷めたお茶を飲み干す。

「いや、まて、勇者よ」

「勇者やあ…」

レナソとシロエが、その表情を見て絶句する。

ただの無表情だ。

これから向こうのものを、ただの障害として、なんの感慨もなく排除する時に自然に浮かぶもの。

庭の雑草、道端の石ころ、食べ終わったアイスの棒、使用済みのティッシュ、そんなものを片付ける時と同じ顔だ。

「安い脅しね。私はそんなものに怯みはしない！」

「そうか、なら好きにしろ」

お互に向こうと、クロテアは即座に詠唱を始める。

田を閉じて、華麗に、軽やかに杖を振り回し、よく響くといい声が  
堂々と呪文を歌う。

そして

「風の乙女 うひやうわー!?」

「ユナンなら帰るが、シロヒもやうやくいと小窓こなホレンジか？」

背後にまわってクロティアの胸を揉みしだく俺に、その場の全員が呆然としていた。

時刻はいつのまにか、夜。

朝、異世界に来たら口クに状況も分からぬまま、いつのまにか

夜。

さて、たつた今起こつた奇妙な出来事について聞いてほしい。

命を狙つて来た敵を無傷で無力化しようと頑張つて見たら、横からドロップキックを喰らつた抜け句、敵と観客の一人がかりでタコ殴りにされ、なおかつ正座の上でかれこれ数時間説教が続いている。

あなたなら、どうする？

「最低だつた

「だまれ、エロオヤジ」

「勇者さま、エッチなのは良くないと思ひます」

世の中何処まで行つても、理不足だとしみじみ思つ。

ちなみに、加害者から被害者に華麗な転身をきめたクロティアは、レナンと一人で俺を散々痛め付けたあと、2階の客室で休んでいる。

「ともあれ、明日になつたら城へ向かつ。シロも今夜はゆつくり休むとよい」

「はい、レナンさま。お休みなさい。勇者さまも」

「うー、お休みー」

シロHは「「コト慈愛の微笑みを浮かべて一礼すると2階へ上がる。

勝手知ったるなんとやら、だろつか。クロテアもシロHも特に部屋を聞いたりはしていない。

「あー、質問が…

「起立じき

ジロリ、ヒレナンの冷たい視線が刺さる。

「俺にもメシと寝床を

「だまれ、エロ親父が…！ 竈の前で灰でもかぶるが良いわー。」

レナンは正座中の俺の目の前で「立くなつて腕を組む。

「全くもつて嘆かわしい…

アレか、おぬしの世界では勇者といつ言葉はエロ得意の隱語かなにかか…？

勇者！ 嘴呼、なんて卑しい職業なんだ…！

とか内心喜びこしき震えたりしておるのか…？

礼儀をわきまえぬは仕方なかう。

あんなふうに畏れを知らず魔術を妨害出来るのはある意味賞賛にあたいるじやう。

じやが、ようこもよつて、ち、ち、ち、ち氣モリヒセーつ

じやうからレナンの怒りゲージが爆発したようだ。

「さなり俺の襟首を両手でつかんでガクガクと揺さぶりながら叫ぶ。

「……やつぱり乳か！ そんなに大きい乳が好きか！？  
つるぺたは希少価値なんじゃぞ！  
ひんにゅーはすてーたすなんじゃ！！」

「悪いインターネットに毒されすぎだー！」

怒りのツボはそこらへんだつたらしく。

「大体、なんでクロは乳モミで、わしが尻叩きなんじゃ！  
らわしから襲え！－ さあ襲え！－  
いいから落ち着けつ 首を絞めるな－」  
「首くらい、……うえあ－？」

「……」

沈黙で耳が痛い。

自分が何を言つたのか気が付いたレナンはみるみるうちに耳まで  
真っ赤に染まり、

「ああああ、何もかもどちらじょーつー」

俺を殴り倒して、自分の部屋へ駆け込んだ。

## 考察1 あることは、そのままに 滞れて溺死しろ！

「さて」

竈の前に腕枕で「ロロ」と転がる。

時刻はそろそろ真夜中と言つといふらか。  
いい加減、眞面目に状況を整理してみよつ。

「こ」は森の中の一軒家だ。家というか、二階建ての屋敷だな。  
石と木で出来ていて、窓は木枠にガラスがはまつていてる。  
外側には、金属製の鎧戸があり、ガツチリ閉じられる。

つまり、だいたい近代レベルの建築技術があるわけだ。

扉の鍵は、中からはツマミを回せば外せるが、外からは鍵を使用  
せねばならない。これは現代レベルだろつ。

そして、台所。

何と、水道がある。

もちろん、金属管の先に蛇口の付いた現代的なものではない。  
シンク代わりの長方形の石の桶に、木の桶で水が導かれている。  
溢れ出した水は、どうやら下水設備もあるのか、そのまま下に敷  
かれた玉砂利に吸い込まれるようにして流れしていく。

と、いかが恐ろしい事に「こ」の台所は現代のキッチンとほとんど変  
わらない。

隅にある怪しい模様が描かれた箱はおそらく魔術で冷やす冷蔵庫だし、棚にはガラスのコップや陶器のカップもある。

流石にガスはないようだが、カマドには冷蔵庫と似たような模様が刻み込まれているので、火力調節も簡単なのかもしれない。

壁の何箇所かには燭台しょくだいがあるものの、光っているのは蠟燭の炎ではなく台そのものだつた。

どうやら魔術による明かりらしく、俺が寝転がつてからしばらくすると順番にゆっくりと消灯して行つた。動作感知式のスイッチかと思わず手を振つたりしてみたが、再び点灯する気配はなかつた。

そして次は……

「……あ、勇者さま？」

ガチャリと扉が開く。

同時に、消えた明かりがいくつかぱつと点灯した。びつやら明かりは持続時間切れで消えたわけではないようだ。

田をむければ、そこには純白のネグリジェに身を包んだシロエが寝ぼけまなこで立つていた。衿元を彩る赤いリボンが愛らしい。

そう、衣服の縫製技術なども不釣り合いなほど高い。

きめの細かい織り方をされた柔らかそうな生地は、その内側の盛り上がりを危険なほどに強調している。

まさに双丘と呼ぶにふさわしいそれは、シロエのわずかな身じろぎに反応してたゆんたゆんと揺れるのだ！

そもそも、布を白や黒に染めるには、意外に技術が必要のはずだ。

それはそれとして、何という小生意氣な乳だ、実にけしからん！

……いかん、ちょっと思考が疾走オーバードライブしてしまった。

「こんな所でじうしたんですかあ？」

「寝てる」

シロエは目を擦りながら、寝転がる俺の前を横切つて棚からグラスをとつて、水を汲んだ。

裾からのぞくスラリと伸びた生足が色っぽい。

「ふふ、またレナンをまと喧嘩ですか？」

シロエはゆるーい笑顔を浮かべると、テーブルについて、コクコクと水を飲みはじめた。

眠いせいか、話し方が幼くなつていて、そこがまた可愛らしい。

「喧嘩に見えるか？」

シロエは飲み干したグラスを置くと、ふにょりと微笑む。

「お父さんが可愛い娘をからかつているようにしか見えなかつたですよー」

と、答えると、そのままテーブルに上半身を投げ出すよつに、突つ伏し、

「ちよつと、うらやましい

かも……」

つぶやくよひつじ、そのまま寝息を立てはじめる。

「おこおこ、寝るなら寝床行けよ」

返事がない。ただの寝ぼけのようだ。

「しょーがねえなあ

立ち上がりシロエの肩を軽く握る。

「まれ、起きあつて」

何度も搔すりてやると、みづから口を少しだけ開ける。

「だつ」「

「はア?」

「だつこ、して?」

「寝起き悪いな、オイ」

半分眠つたままでも、両腕を差し出すシロエに苦笑いをひとつ。

正直にいえば腰にきそりで少し不安だったが、起き上げてみれば予想外に軽い、といふか余裕だった。

レナンも見た目よりかなり軽かつたし、もしかしたら、肉体の組成が俺とは少し違うのかも知れない。

ぎゅっと抱き着いてくるシロエは口を閉じたまま、嬉しそうに微笑んでいる。実に無邪気なものだ。

乳を押し付けられるこっちの葛藤など、夢にも気付くまい。

「部屋は、ひとつ皿でいいんだな？」

「うん~」

階段を上り、ひとつ皿のドア。

シロエを左腕で抱き直して開ける。

相手がしがみついてくる分、片手でも何とかなった。

薄暗い室内に、二つベッドが並び、その間には書き物机らしき家具が置いてある。

「ま、ひ、つ、 わぶつー？」

せつとベッドに降りこむやつたシロエが、手をのばして俺を引き寄せた。

あつそりバランスが崩され、顔がもうに軟着陸する。  
どこにいて、……たゆんと。

「……ねー、こつしょー、ねよ?  
「はー」

待て。

これは明らかにおかしい。  
当たり前だ、寝ぼけてるし。  
いやもうでは無く

「……だめ?」

シロエが俺の頭をぎゅっと抱きしめる。柔らかな膨らみが顔をしつつ、息が詰まる。

「おままじやますい。

理性とかじやなく、生命的な意味で。理性もヤバイけれど。

「おねがい、おとーわん……」

ギクリ、と背骨が固まる。

そのまましばらぐすると完全に寝入ったのか腕が緩み、ようやく幸せな地獄を脱出した。

シーツをかけてやる時に足が動いてちらりと白い下着が見えたりもしたが、構わず外へ向かつ。

そう、俺は中年だった。

なんとなく雰囲気に流されかけてはいたが、ここにいるみんな子供のような年齢ではないか。

背中に冷や水をぶつ掛けられたかのような気分で、すいすいと部屋の外に向かつ。

「……ちょっと残念だったかな？」

扉を開けて、肩越しに振り向いて格好を付けて一言。

このぐらいは許されるだろ？

「私は物凄く残念だったわよ？」

「ツ？！」

完全に隙を突かれて廊下に押し出される。

「残念だわ、指一本でも出したら……」  
「ちよ、おまつ！？」

クロテアはしゅっしゅっと、出刃包丁を素振りしてみせる。その瞳はハイライトの消えたいわゆるヤンマーレの目だった。じつとりとした嫌な汗が背中を濡らす。

「電波的な真似はやめれ」  
「あんた魔術効かないし、仕方ないでしょ？」

だからって出刃包丁かよ！？ とか、獵奇にも程があるぞ！？ とか、心の中だけで突っ込んで、なんとか気を取り直し、寝床に戻る事にした。

どうせここにはまともに話を聞かないし。

「じゃー、お休み。せめて、鞘のある刃物にしどけ。手、切るから」  
「夜ばいに来たら刺すわよ？」  
「へいへい……」  
「……シロを運んでくれた事には感謝するわ。お休み」  
「へいへい……」

振り向いた時には扉は既に閉ざされていた。

たらたらと階段を降りながら、考察を再開する。

「”出刃包丁”か……」

出刃包丁があるところだとせ。

「……やはり鍛造技術もあるか」

「丁寧に、刃紋まで浮かべた柳刃包丁をもとの場所に戻す。

魔術があるせいか、実にカオスな技術レベルの世界らしい。しかし、これだけの金属加工が出来るなら、人間相手の戦争ならそうそう不利になるとは考えにくい。

通常であれば、魔物の戦闘力がズバ抜けてい、と判断するところだが……

「魔術の使い方からして、そんなにシリアスな戦いとは思えんよなあ？」

竈の前に改めて転がりなおす。

シロエが来てから点灯していた明かりが再び消えた。

ついでに冷蔵庫や野菜庫をあさって調べてみた食品は、見たことのある物ばかりだった。

味まではわからないので、試しにくすねて来た、不確定名「林檎つぽい果物」を、服で拭つてかじつてみる。

「おう、林檎だな」

多少酸味が強いが、間違いなく林檎だった。

とは言え、クッキーなんぞという菓子まであるのだから、食べ物については元の世界とほぼ同じと考えてはいたが。

現代でこそクッキーは簡単な焼き菓子だが、それはオープンが使えたり、バターや砂糖が簡単に手に入るからこそだ。

冷蔵設備がなければ、バターなんぞ保存しようがないし、火力調節の簡単な機械式オープンだからこそ、焼き加減も自在なのだ。

実のところ世界がユルい分にはなんの問題がない。  
いや、むしろ大歓迎だ。

なんせ、こちらはなんの取り柄もない中年なのだ。  
あまりにハードでダークなファンタジー世界だと、屋敷から出た途端ランダムエンカウントで即死しかねないし。

## 優しい真夜中の少女たち

竈でチロチロと燃える燠火あきびは、掛ける物がなくとも十分な暖かさを感じさせてくれる。

「ひとつとしながら踊る火を眺めていると、何やらそれが人型に見えてきた。

バレリーナのように深紅の透ける衣装に身を包んだそれは、クルクルと炎のたなびきに合わせるように踊る。すっと通った眉筋の、凜々しくも可愛らしさ少女の姿だ。

「……夢、か？ それとも精霊の類たぐいか？」

ぽんやりとつぶやくと、それは一ひとつと微笑んで、より高く舞い、より激しく踊る。

「おう、大したもんだ」

ぱちぱちと手を叩いてやると、それは嬉しそうにますます激しく舞い始める。

「どうやら、本物らしい。

なんせ、その踊りが激しくなるのと合わせて、竈の温度もうなぎ登りだ。

「さすがに熱いぞ」

「うるさいと転がつて距離をとると、精靈は踊りを止め、口元に手を当て、ひとしきり楽しげに笑つと、優雅に一礼して消えてしまつた。

どうやら、精靈魔術とでも言つた系統もあるようだな。  
精靈がいるんだし。

それにしても、だ。

「こんだけ攻撃手段が有り余つてゐるのに、なんで魔物に押されっぱなしなんだか……」

答えの出ぬ問いかけ。

俺はそのままとひとひとした睡魔に溺れて行く。

視界の隅で微笑むのは、精靈か、それとも

「んー？」

やわやわと揉みしだかれる感触に意識が覚醒していく。

夢うつつの錯覚ではなかつた。

田を開ければそこはヴォールに閉ざされた天蓋付きのベッドの上で、寄り添うよつて寝そべつた少女が、ゆるゆると手を動かしていた。

「ナニやつてんだ、お前？ お？」

軽く脳天にチョップを落とそうとして、指一本動かせない事に気

づく。

「無料な事を言ひついでない」

白髪赤眼の少女は、手を止めてのしかかる。  
紅い唇が今にも触れそうな距離で囁く。

「肌を晒した男と女が闇の中じゃ、することはないといつかあるまい？」

甘い吐息に、脳の奥が痺れるような酩酊感と、炎のような衝動が  
身体に宿る。

「まあ、やうなんだが

少女が身体を起こしてまたがつた。

うあ、うあ。

そんな湿った音。熱くぬめった感触。  
少女は潤んだ瞳でこちらを見下ろす。  
まだ、だ。

「何をためらひへ。おぬしのいはほれ、この通りではないか

胸に手をつき、唇を触れる寸前まで近付けて囁く。  
意識を蕩けさせる甘い吐息。

うあ、うあ…

少女の腰だけがいやらしくねり、とんとんとした汁が擦りつけられる。

「あの一人を気にしておるのか？ ならば案ずる事はない」

その両掌が頬を挟み、紅い瞳がこちらの目を覗き込む。

「ここは魔術的に開かれておる。 んつ はあ……」

切なげにこぼれる甘い吐息。

少女はふるふると一瞬だけ張り詰め、弛緩する。

「はあ、はあ 見よ、おぬしがあまりに焦らすものじやから……」

少女は淫らな笑みを浮かべ、細い指先でこりらの胸を撫で回す。

「そりやあスマン。 実のところ、じかんとじつもやる気満々だったりするわけなんだが」

当然だろう。

見目麗しい少女が自分に跨がり、腰を振つて励んでいるのだ。身体がまともに動いていれば、即座に押し倒すのもやぶさかではない。

「ふふ。 ならば後は身体で示してくれればよいか？」

少女は腰を浮かすと、それを握り、自分のそこそこ当てがつた。先端が熱い潤みに触れ、じわりと快感が染み込んでくる。

後は、ほんの少し腰を下ろせば

「で、お前誰？」

時が、止まる。

「し、失敬な！ わしは 」

「レナンとか言つなよ？」

顔見知りの姿でやると、後で氣まずいから止めてくれないか？」

少女は悔しそうに、唇を尖らせる。

「いつ氣づきましたか？」

「最初から。色気を出し過ぎたな。あ、性的な意味で」

「不覚です、ミスチヨイスでしたか」

「ついでに言えば、お前が何なのかは想像もついてるぞ？」

「……伺いましょう」

「夢魔の類いだろ？」

「こには夢の中だ。」

淫らな夢を見させて、生命力的なものを奪う。

吐息には性的興奮をもたらす成分か、魔術的何かが有るはずだ。じやなかつたら、普通にキスする場面でみんなに勿体つけたりしないだろ？

多分、実体の方もオレの体に接触している状態のはずだ。ブレスを嗅がせにやならんからな」

「成る程。しかし、これが夢だと判断するのは些<sup>少</sup>か早計ではないですか？」

モデルの少女が思い余つてと言つ事も

「これでも、自分の容姿と人格が、若い異性をメロメロにするかどうか判断がつく程度には歳をとつてるさ。H A H A H A……」

「えー、なんだか謝つた方が良さそうですか？」

「止めれ！ そこで謝られると、本<sup>ヤ</sup>氣<sup>マジ</sup>で凹むから…？」

望陀の涙を流す俺に、少し引き気味に夢魔がフォローを繰り返しててくれる。

かなりいい子のようだ。

レナンとクロに爪の垢を煎じて飲ませたい。

「そ、それにしても素晴らしい判断力ですね。今までそこまで気づいた人間はいませんよ」

「慰めるなつて…… ああ、やつぱり夜な夜な獲物を求めて徘徊するのか？」

「失敬な！ 淫魔<sup>ビッチ</sup>みたいに言わないで下さい。自慢じやありませんが、これが初めてです！」

「いだだだつ！？ 悪かった！ 謝る！ だから乳首抓るのは止めれつ」

むーっと頬を膨らませていた夢魔は、すぐにくすつと笑つた。

その姿がにじむよ<sup>う</sup>うぼやけ、新しい姿に結像する。

整つた輪郭、そこにはめ込まれた切れ長の大きな瞳は、濡れたようになに艶やかに輝く髪と同じ漆黒。

抜けのような純白の肌をもつ身体は、少女から大人へ成長し始め



後腐れの無い遊びであつたなら、割り切つて楽しんでしまつただろ'つ。

実際、下半身の方は完全に臨戦体勢。先端に触れる柔肉を蹂躪する時を今か今かと待ち望んでいる。

「オレは魔王との戦争に駆り出されるために異世界から呼び出されたらしいからな。

朝にはここから出発するし、そうなればいつ死ぬか、死なないまでも元の世界に戻る可能性もある。

それに、オレはそろそろ人生の折り返し地点を通りすぎる年寄りだ。

お前ほどの女なら、若くていい男なんかより取り見取りだら? ものす"く残念ではあるが、別のパートナーを探した方が

「

「えい」

つぶん。

音にすればそんな感じだろうか?

何か薄いものを破る感触と、腰にかかる一人分の体重。

そして、夢魔は痛みをこらえるよつて、僅かに震えた。

「すみません、腰が滑りました」

夢魔はやたら嬉しそうに謝つた。

幻の闇は消え失せ、キッチンの固い床の上、体勢だけは夢と同じく、しつかりとつながりあつていた。

「えい、とか言つてただろうが!-?」

夢魔はゆつくりと身体を倒し、頬を胸に擦り付ける。

「」まけえ事は良いんだよ！ つて感じです

ため息をひとつ。

「好き好んで寿命を短く設定することは無いだろが？」

ようやく動かせるようになつた腕を、その身体にまわす。最後に人肌に触れたのはいつだつたか。

「貴方は……」

夢魔はこちらの頬を両手で挟み、その漆黒の瞳でまつすぐを見つめた。

「貴方は、貴方が思つてゐるより、ずっとキヨートですよ」

心臓がトクン、と脈打つ。

そのまま、どちらからともなく、深く口づける。

「大事なのは、どれだけ生きたかじゃなくて、どう生きたかだと思います」

鎧戸の隙間から、登り始めた太陽の光が僅かに差し込み始めた。

「今日は時間切れですが

」

ちゅ、ともう一度軽くキス。

「短いなら短いなりに、とびきり濃厚に過いせば良いんです。  
だから、夜な夜な、優しく、たっぷりと、搾りとつてあげますね  
？」

夢魔は柔らかい笑みを浮かべ、日の光に溶けるように消えて行つ  
た。

残されたのは……

「どうじうど？」「？」

半裸の中年一人と。

「あと、精霊の癖にそんな目で見るのは止めれ。死にたくなるから  
……」「……」

ジットリとした目で竈の中からじちりを睨む精霊が一人。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1296z/>

やさぐれ勇者血風伝 勇者様はオヤジ！？

2011年12月5日20時16分発行